

うとするが不破関は塞がれ、筑紫・吉備等の協力も難航し、動員計画に狂いが生じたのである。七月二十二日、最後の決戦に至るまで両軍は各地で戦闘を繰り返し、大海人皇子優勢のもとに瀬田で対峙した。ここに大友率いる軍勢は敗れ、首脳部は逃走した。翌日大津京は陥落し、大友皇子は山崎に隠れ、二十五年の生涯をとじた。朝廷の重臣たちは極刑・斬殺・流罪などの刑に処せられたが、天武の時代になって、天智天皇の皇子たちは天武天皇の皇子たちと同様の扱いを受けている。天武天皇の皇后が天智天皇の娘（後の持統天皇）であることが背景にはあったものと推察されている。

この内乱の意義は単なる皇位継承だけでなく、天智・天武両朝が動乱する東アジア諸国を見据え、大豪族たちをまとめることにより、日本国の統一と律令制建設をめざしたことにある。大海人皇子は岡本宮の南に新宮を造営し、六七三年二月飛鳥浄御原宮に天武天皇として即位した。天武天皇は乱の勝利によって有力豪族の地位の低下に反し、天皇制の思想的基盤の確立に努め、官僚制の整備を推進した。そして、「八色の姓やくさのかばね」、「国・評制の確立」、「諸臣四八階の新官位体制」、更に「飛鳥浄御原令」などを体系化し、持統天皇に受け継がれる。

二 記紀に見る豊前国

記紀の成り立ち

日本人として『古事記』、『日本書紀』を知らない人はまずいと言っている。それだけに日本の歴史の成り立ちを、この両書に頼るところが大きいと言える。

『古事記』は、天武天皇の勅により稗田阿礼ひえだのあれが誦習した帝紀・旧辞を、元明天皇の勅により太安万侶おおのやすまろが選録して和銅五年（七二二）正月に出来上がったものである。古事記の内容は上・中・下の三巻から成っている。

・上巻 神代史

・中巻 第一代神武天皇～第十五代応神天皇

・下巻 第十六代仁德天皇～第三十三代推古天皇

『日本書紀』は、奈良時代に完成した我が国最古の勅撰の正史で、六国史のうちの一つである。編纂は舍人親王とわりんのうらが中心となり、『古事記』から遅れること八年の養老四年（七二〇）に完成した。内容は神代から持統天皇までを漢文体で記述された史書である。

両書は時代的にも共通するところが見られるものの、特徴の一つとして、『古事記』は神話の比重が大きく、『日本書紀』は六・七世紀の記事が多く編年史書の体裁が組まれている。

豊国の起源

豊国の起源については、『豊後国風土記』中に次の記事が見える。

景行天皇が九州を巡幸する際、豊国直らの祖菟名手が天皇に随行して中臣村で宿泊した次の日、菟名手の説明に対し天皇は「天の瑞物、地の豊草なり、汝が治むる国は豊国と謂ふべし」と言つて、「豊国直」の姓を与え、その治める国を豊国ということになったという。この「直」の成立時期は五・六世紀ごろと考えられ、当時国造の地位をもった地方の豪族に一律に与えられたものであることから、豊国の成立もこのころと考えられる。

このほか『日本書紀』には天皇遠征説話に因み、豊国縁の地名や地方豪族の名前等が見える。

景行天皇十二年九月条

…… (略) 神夏磯媛という女酋が船上の賢木に神宝の太刀・鏡・玉を

つけ船の舳先に白旗を立てて服従を申し入れてくる。

…… (略) そのとき皇命に従わないといつてゐる者を急いで征伐してほしいといつて菟狭(宇佐力)川上(駅館川の上流を指す)の山谷で君主の名をかたる鼻垂、御木川(山国川カ)の川上に住んでしばしば人民から掠奪する耳垂、高羽の川上(英彦山川の上流カ)でひそかに徒党を組む麻剥、緑野の川上の險阻な土地(筑豊付近カ)にかくれ住む土折・猪折などの名をあげる。

…… (略) 武諸木らは計略をもつて麻剥らを中心とく捕らえて殺す。

そして天皇は九州へ上陸し、豊の長峽県に行宮を建てて(行橋付近カ)滞在したので、そこを「京」(京都郡)と名付けた。

この内容は、景行天皇が周防国に到着したとき多臣・国前臣・物部君らの使者を出した時の文体である。説話自体の信憑性に欠くところが大きいものの、様々な形で各地の名前が記されているのは確かであり、五世紀ごろの大和政権が及ぼす傘下に豊前国・豊後国等が組み込まれていたことは事実であろう。

更に興味深いのは、「豊の長峽県に行宮を建てて滞在したので、そこを「京」と名付けた。」という文体である。京は京都郡をさしており、「長峽県に行宮」は現在の行橋市延永付近をさすといわれている。そこに「行宮」を建てて住んだというから宮殿クラスの建物を想定せざるを得ない。考古学的な調査報告はされていないが、県制は五世紀後半を遡らないころには成立されていたと考えられ、苅田町の御所山古墳(前方後円墳・五世紀後半ごろ)の存在が興味ある事実として注目される。

豊の豪族

豊国の大酋長墓とされている御所山古墳は、古墳の石室構造及び形態から筑紫君磐井との関わりが考えられている。継体天皇二十一年(五二七)、新羅に侵食された任那回復のために、筑紫君磐井は、肥・豊の豪族を勢力下に率いて、大和政権率いる近江毛野臣六万の軍勢と反乱を起こした。天皇はこの反乱を鎮圧するため、物部麁鹿火を征夷討伐將軍として九州に送り、約二年にわたる戦いが繰り広げ

られた。そして、継体二十二年（五二八）筑紫君磐井は斬殺され戦いは終了した。『筑後国風土記』によると、筑紫君磐井は上膳^{かみつみけのあがた} 県（上毛郡カ）に遁走したと記されており、『日本書紀』とくいちがいを見せている。いずれにしても「豊」豪族を勢力下におき、又は頼りにしていたことは事実であろう。

大和政権は国造や屯倉^{みやけ}等を配置し、地方の強化体制を整えていった。『隋書』中の「軍尼」及び「伊尼冀」は『日本書紀』に見える国造及び稲置等と考えられ、その中に屯倉と呼ばれる比較的小規模な、王家の直轄領の管理者等が置かれた。豊国に見える屯倉は五か所であり、全国二六か所からするとかなり多い数字を示している。

- ・ 膝崎屯倉（旧企救郡）
- ・ 大拔屯倉（旧企救郡）
- ・ 肝等屯倉（旧京都郡）
- ・ 我鹿屯倉（旧田川郡）
- ・ 桑原屯倉（旧築城郡）

九州ではこのほか筑紫国が二か所、火国が一か所見える。全国規模で屯倉を増やしていく傾向が見られ、推古天皇十五年（六〇七）には国ごとに屯倉が置かれたことが伺える。

三 古代山城の意義

朝鮮式山城 明治三十一年（一八九八）久留米の小林庄次郎をめぐって という人が、坪井正五郎のすすめで「筑後国高良山中の神籠石なるものに就いて」と題し、人類学雑誌に発表したのがきっかけとなり、神籠石論争に発展した。論争の内容は「靈域説」か「山城説」かである。

- ・ 山城説：朝鮮の山城と比較し、形状・構造等から古代山城であるとの説（関野 貞、八木契三郎、谷井濟一ら）
- ・ 靈域説：日本では神奈備^{かんなび}という神霊を鎮め祀る神聖な地域で、列石がそれである。

∴ 列石は一列で防御に役に立たないこと。
 ∴ 神籠石内に靈域を優位にさせる神社が存在すること。（坪井正五郎、喜田貞吉ら）

この論争は明治以降、たびたび引き出され学会の焦点となった。終戦後、帯隈山神籠石・おつぼ山神籠石の発掘調査で、列石前面に柱を立てた柱穴が列を作っていることや列石の後に版築土塁を築いていることなどが明らかになり、「山城説」という解釈が一般的になったのである。その後、鬼の城（岡山県）や大廻り小廻り（岡山県）などが調査され山城説はますます不動のものとなった。しかし神籠石山城は築城時期や歴史的背景など、まだまだ多くの問題を抱えており、最近では筑紫野市